

【論文】

広島高等師範学校の教育博物館

Educational Museum at Hiroshima Higher Normal School

佐藤 優香^{*}
Yuuka SATO

1. はじめに

19世紀後半から20世紀初頭にかけて、世界中に数多くの教育博物館が設立された。日本においては、文部省による最初の博物館として1877(明治10)年、東京上野に教育博物館が開館した。同館の経営については、その創業に寄与した手島精一、およびその停滞期において同館の再建に向けての努力をなし、教育機能の拡大に貢献した棚橋源太郎を中心にした考察を試み、「教育博物館における教育機能の拡張—手島精一と棚橋源太郎による西洋情報の受容—」にまとめた¹⁾。

東京の教育博物館は、森有礼の文政期において縮小化が進められ、文部省の直轄から東京の高等師範学校の附属機関となり、1914(大正3)年まで同校によって管理された。この間の1902(明治35)年に、東京につぐ第2の高等師範学校として広島高等師範学校が設けられると、そこにおいても1915(大正4)年に教育博物館が開設された。ただし、広島の場合は初代校長北条時敬が1913(大正2)年に東北帝国大学総長へと転出するに際しての記念事業として企画されたもので、教職員・卒業生などからの寄付金をもって誕生した。東京の教育博物館は、文部省の博物館政策の新しい展開に伴い1914(大正3)年には東京高等師範学校の附属をはなれ、1921(大正10)年にはその名称から教育の二文字がはずされて自然科学の博物館への道を歩むことになるが、広島の教

育博物館はそれ以降も、地域社会との結びつきを強めて市民に開かれ、その名のとおりの教育博物館として存立した²⁾。

本稿では、広島高等師範学校附属教育博物館が、どのようにして設立に至りどのような機能を持っていたのかを、東京との違いを考慮しつつ、日本における代表的な2つの教育博物館の実態を説明することを目的とする。その意味で本稿は前稿の続編であり、その補完をなすものである。

2. 教育博物館の発端

教育博物館とは何か。教育博物館の活動が最も活発であった時代に、その最も盛んであったアメリカで出版された教育学辞典である、モンロー(Monroe, P., 1869–1948)の編集した A Cyclopaedia of Education³⁾から、その答えをみつけた。そこにおいて教育博物館(Educational Museum)とは、「学校と学校での仕事に実例的、比較的、決定的関係をもつコレクション、あるいは専門職としての、科学としての、社会制度としての教育にかかわるコレクションの保存と展示のための機関である」と定義づけられている。また、教育図書館(Educational Library)、教育実験室(Educational Laboratory)、モデル・スクール(Model School)、学芸発表会(School Exhibit)、学校展示会(School Exhibition)とのちがいが説

* 甲南女子大学大学院

平成10年8月20日受理

明され、教育博物館の収集物は教育にかかわっているが、学校博物館 (School Museum) とは明確に区別される。学校博物館は、直接に生徒のために存在し、教授の手段のみ、すなわち現実の授業において利用される装置、用具、材料を所蔵しているのに対して、教育博物館は、現実の授業に対してよりも、施設としての、専門職としての、科学としての教育に関係しており、生徒のためだけではなく教師、学校行政に関心を抱いている人々、教育研究者、ひろくは一般大衆のために存在している博物館である、とされている。そして、その収集物は授業において使用されるだけではなく、それ自体として研究されたり考案されたりし、教育の方法、教育の成果、教育の組織と管理の改善と普及にかかわっているのである、と説明されている。

こうした「教育博物館」という思想のはじまりは、比較教育学の祖といわれるフランスのジュリアン (Jullien, M. A., 1775-1848) が、1817年に記した *Esquisse d'un ouvrage sur l'éducation comparée* にみられる⁴。それは、この著書のなかで彼が「科学としての教育学の研究を目ざし、それに資するための実証研究の素材として、各国の教育情報の必要性を訴え、また、あわせて教員養成の一助として、国の内外の教材を収集して比較研究を行う教育研究所の設置を提案していた」⁵ からである。

教育博物館の最初のもは、カナダのオンタリオ州に誕生したオンタリオ州教育局教育博物館 (The Educational Museum at the Ontario Provincial Educational Department) である。これは、1845年、州の教育長であったライアーソン (Ryerson, E., 1803-1882) が、アメリカの学校で見たヨーロッパモデルの学校教材を、カナダの製造業者に複製させる目的で購入するために、州政府から£100与えられたことに端を発している⁶。ここでの学校教材のコレクションの場合は、1850年に設立され、1881年まで続いた。このトロントの教育博物館はまず、それらの教育品が優れているということを実例でもって明らかにして、公開された展示品の複製品を学校に販売するという方法で州の学校の教育設備を顕著に改善した。そして10年のうちに、カナダの製造業者が教材、学校机、そのほかの必要な物を製造できるまでに導き、また、多くのアメリカ人教師の訪問

をとおして、アメリカの学校にも影響を与えた。特に、オスウィーゴ師範学校の校長シェルドン (Sheldon, E. A., 1823-1897) は、1859年にトロントのコレクションを視察し、その結果、実物教授の普及に寄与することになる。いわゆるオスウィーゴ運動の起こりである⁷。日本からは、フィラデルフィアで開かれたアメリカ独立百年記念万国博覧会に参加した、文部大輔の田中不二麿や、後に東京の教育博物館の経営に関わることになる手島精一らがトロントに立ち寄り、このコレクションを見て、日本の教育博物館設立に大きな影響をもたらすのである⁸。

このような、海外情報を広島高等師範学校に紹介した人物として、英語教授であった牧一が挙げられる。同窓会の雑誌には、牧の「教育博物館の話」⁹が掲載され、世界の教育博物館についての紹介がなされている。ここで、牧は、先述のモンローの辞典やコロンビア・ティーチャーズカレッジのアンドリュースが書いた論文などを参考にしている。このアンドリュースの論文では、教育博物館を設置者別に分類し、その役割や収集すべきものをくわしく述べているが、それによると教員養成機関において教育博物館は、観察や実習のための附属学校、教育図書館とならぶ重要な機関であり、出版、製造業者の提供物や生徒作品の展示、州や国からの巡回展示の展示場として研究を援助すべきであるとし、収集すべきコレクションは、「(1)教育活動に使用される建物や設備に関するもの (school plant)、(2)教材、教具、教科書、教授マニュアルなど、実際の教授のための道具 (equipment for teaching)、(3)生徒の作品やテストなど、教授の客観的記録 (result of teaching)」¹⁰とされている。このアンドリュースの論文は、教育博物館だけを取り上げて述べているが、その博物館理論は、あらゆるタイプの博物館経営に適用するようなものであった。

3. 教育博物館の設立

1) 東京の教育博物館

東京の教育博物館は、1877 (明治10) 年に文部省の初めての博物館として開館した。開館から10年にわたり、手島精一が経営の衝に当り、海外との交流につとめ、新しい教育や教具を日本各地に普及させ

るのに寄与した。しかし、森有礼の政策によって、教育博物館は、収集の範囲や経営が縮小され、1889（明治22）年には、高等師範学校の附属となった。それからの教育博物館は、世間に忘れられたような存在となり、教育ジャーナリズムからも、かなり辛口の批評をうけることになった。そうした教育博物館が、再び世間に注目されるようになるのは、棚橋源太郎が主事となって、新しい活動を始めてからである。

棚橋源太郎は、まず、教育品研究会を発足させて教職にある人のための特別室を公開し、教具の研究機関として教育博物館を機能させた。また、通俗教育に関する文部省の通牒を受けて、通俗教育館を公開した。

2）広島教育博物館

広島高等師範学校では、1915（大正4）年に附属教育博物館が設立された。先述のように、東京の教育博物館は、高等師範学校が通俗教育推進の中核になるようにとの通牒をうけてはじめて、通俗教育館の公開を行ない、特別室も教育関係者のみに限って公開していた。これに対して広島高等師範学校は1911（明治44）年の通俗教育調査委員会官制の公布以前の1908（明治41）年から、附属図書館に公衆観覧室を公開し、すでに市民の期待にこたえる活動を始めていた。官立学校の図書館が市民に公開されるのは初めての事例で、1908（明治41）年4月17日の『官報』にも、その規則や「本校は官立学校にかかる、先例を開きたるを荣誉とす」という図書館課長をつとめていた教授の「図書館公開ノ辞」が紹介された¹¹。地元の『芸備日日新聞』にも「広島高師の設置以来、同校が直接間接に広島市民に向って、趣味と実益とを供給するの多大なるを欣ぶと共に、其圖書の公開を断行して遍く多数読書子の渴仰を慰するの好意を多謝せざるべからず」¹²と感謝の意を表わした報道がなされた。

それから8年後の1915（大正4）年に広島高等師範学校の教育博物館（以下、広島教育博物館）が設立される。その経緯は『広島大学二十五年史』によると、「大正2年（1913）5月、北条時敬の東北帝国大学総長転任により、尚志同窓会では北条校長頌徳記念事業として教育博物館の建築計画を立てた。

ところが翌年2月、かつて附属中・小学校が使用し、その後附属中学校の寄宿舎にあてられていた旧土木監督署の土地・建物が内務省より文部省へ保管換えとなったので、これを教育博物館に転用することとした。したがって、同窓会では計画を変更し、その敷地内に永久記念物として、また貴重品・教育参考品などを陳列するための煉瓦造りの建物を建築することとした。建築費6000円、その他諸設備費1270円余りを計上して工事に着工し、大正4年7月に竣工した。尚志同窓会は北条校長の徳風を永く懐う意味からこれを永懐閣と命名し、教育博物館の所用に供するために母校へ寄付した。こうして同年11月、旧土木監督署と永懐閣をもって教育博物館が開館された」¹³となっている。

広島教育博物館は、このように広島高等師範学校の創立者北条校長の記念事業として誕生するが、すでに東京高等師範学校に先例のあることであり、学内では教育品を展示する機関が必要という声が出ていた。ちなみに、同校の教授であった岡部為吉は「教育参考室に就きて」¹⁴という一文の中で、「師範学校殊に高等師範学校の如きは如何に教育精神盛なりとも教育参考室の設備なければ完全なる発達を遂げ得べからず」と述べている。教育博物館が開館したときの『学校教育』記事には「従来本校に於いては教育研究の一機関として職員及生徒より成る教育研究会なる団体があつて、毎月本誌『学校教育』を発行し又時々教育講演会を開催するの外教育上の研究物考案品となる様な一般教育品図書雑誌等を蒐集して教育参考室なるものを設けて教育研究をなしたものである。ところが漸次其研究が進展するに伴うて教育博物館の必要を感じ予て之が設置を企画して居た」¹⁵とあるように、さまざまな意味において広島高等師範学校にとって待望の博物館だったのである。

広島高等師範学校では、1915（大正4）年11月10日「御大礼奉祝会」を催した。教育博物館開館の式は、その際に行われている。これについて当時の校長であった幣原坦は「我々は此の博物館が我が国に於ける教育研究の一中心たらんことを希望してやまない。而して是れが、我々の最も記念すべき御大典挙行の期を以て開館し得るのは、何よりの仕合である」と述べており、こうした意味におい

でも喜ばれることであったのである。

4. 広島高等師範学校附属教育博物館の特質

開館後のまもないころは、研究部、考案品部、参考品部の3部に分けて運営していた。

『学校教育』に載せられた「教育博物館便り」¹⁷から、開館当初の状況を紹介してみると以下のとおりである。まず、研究部では3つの研究室を設け、心理学教育学倫理学等に関する図書雑誌統計類を蔵置し、研究者のために心理学の実験機械を設置した。考案品部には、職員生徒の研究事項考案物を陳列した。その種類は「(1)独創になれるもの (2)一部分の工夫研究になれるもの (3)応用方法の方面を研究考案せるもの (4)批評意見を有するもの等」であった。「考案品の陳列は雑誌と多数の物品を陳列するよりも可成精選して折々陳列換をすることになつてゐる」とされていた。参考品部は、「教育に関する新刊図書内外教育雑誌教育品中価値ありと認めたもの本校卒業生考案の器械類寄贈図書教育品等を陳列して居る」となっていた。「陳列の物品は約九十種で一種類の陳列個数は三百にも及ぶもの」もあった。「一般公衆の観覧日は毎週火木土の三日であるが地方視察員等の為には特に其他の日にも観覧の便を計り」研究者に対しては「出来得る丈便宜を与へる」ようにし、また「教育品の批評や質疑には喜んで応ずる方針」で「図書教育品其他教育上の参考資料ともなるべきものは奮って寄贈せられんことを希望」していた。

教育博物館の規程は、開館の翌年に「仮規程」として定められた。

「広島高等師範学校教育博物館仮規程

一教育博物館ハ職員教官生徒其他教育ニ趣味ヲ有スルモノカ教育ノ学理及實際ニ関スル諸般ノ研究ヲナス所トス

一本館ヲ分チテ三部トス

第一部 研究部

第二部 考案品部

第三部 参考品部

一研究部(本館階上三室)ハ教育学心理学ニ関スル諸機械図書等ヲ蔵置シ教育ノ研究ニ従事スル所トス

一考案品部ハ分テ本校各科各学部ノ考案品陳列

(本館階上二室)附属中小学校考案品陳列(本館階下二室)ノニトス

一参考品部(記念館階下ノ一室)ハ新刊図書内外教育雑誌教育品等一般教育上ノ参考トナルヘキモノヲ陳列ス

一前二条ノ陳列室ニ陳列スヘキ考案品及参考品ハ予メ所属各部教官職員ノ品ヲ経タルモノタルヲ要ス但シ其品目ノ種類ニヨリテハ評議会ノ審議ヲ経テ之レカ陳列ノ可否ヲ決スルコトアルヘシ

一教育博物館ニ左ノ役員ヲ置ク

主事 一名 幹事 若干名 常務幹事 一名

一教育博物館ノ事務ヲ分チテ左ノ五部トシ本館役員ノ中ニ就キ各部ニ各主任一名ヲ置ク

研究部、本校考案品部、附属学校考案品部、参考品部、庶務部

一本校生徒ヲシテ理事ノ名ヲ以テ本館ニ関スル実務ノ見習ヲナサシムルコトアルヘシ」¹⁸

この仮規程のなかにも「生徒ヲシテ理事ノ名ヲ以テ本館ニ関スル実務ノ見習ヲナサシムルコトアルヘシ」とあるように、生徒の実習に教育博物館は使用されていた。そのことは「広島高等師範学校教育演習ニ関スル規程」の第十一条で「実務ニツキテハ附属学校ニ於ケル校務ノ実習及随時舍務図書館教育博物館特別教室等ニ関スル実習又ハ見学ヲナサシメ当該実務ニ関係アル教職員之ヲ指導ス」と定められていた。上記の仮規定が定められた翌年には、仮規程は本規程に改められ、規則の整備がなされた。

「広島高等師範学校教育博物館規程

第一条 教育博物館ハ教育ノ学理及實際ニ関シ研究ヲナシ且ツ諸般ノ教育品ヲ陳列スル所トス

第二条 本館ニ左ノ三部ヲ置ク

研究部 考案品部 参考品部

研究部ハ教育ニ関スル図書及諸器械ヲ蔵置シ教育ノ研究ヲナスモノトス

考案品部ハ本校附属学校及一般ノ教育上ノ考案品ヲ陳列スルモノトス

参考品部ハ更ニ之ヲ分チテ本校参考品部、附属中学校参考品部、附属小学校参考品部、一般参考品部トシ本校附属学校及一般ノ教育上ノ研究物並ニ参考品ヲ陳列スルモノトス

第三条 教育博物館ニ主事ノ外左ノ役員ヲ置ク
商議員若干名 幹事若干名 常務幹事一名
商議員ハ本館ニ関スル重要事項ノ協議ニ参与
ス

幹事ハ部ニ分属シ事務ヲ処理ス但シ各部幹事
ノ内一名ハ主任トシ所属事務ヲ管掌ス

常務幹事ハ庶務ヲ処理ス

第四条 本校生徒ヲシテ本館ニ関スル事務ノ補
助ヲナサシムルコトアルヘシ

第五条 本館ハ公衆ニ対シ無料ニテ観覧ヲ許シ
又希望ニヨリ第一条ノ研究ヲナスコトヲ許ス

観覧、研究ニ関スル規程ハ別ニ之ヲ定ム

第六条 本館ハ隨時教育展覧会講演会等ヲ開催
スルコトアルヘシ

第七条 本館ハ教育上ノ問題又ハ教育品ニ関シ
質問ヲナシ若クハ批判ヲ乞フ者アルトキハ成ル
ヘク之ニ応スヘシ

第八条 観覧研究ニ供スル目的ヲ以テ官庁学校
等ヨリ教育品又ハ教育図書ノ委託ヲ受ケタルト
キハ時宜ニヨリ之ニ応スルコトアルヘシ」¹⁹

前年の仮規定では「研究ヲナス所」とされていた
広島教育博物館は「研究ヲナシ且ツ諸般ノ教育品ヲ
陳列スル所」と、ものを展示することが研究となら
んで重要視されることになった。また、教育展覧会
や後援会を開催すること、教育に関する質問に応じ
ることも規定に含まれるようになった。この改正に
よって、広島教育博物館は、研究にとどまらず、そ
の成果をひろく公開することが活動として大きく加
えられ、教育博物館がユニバーシティ・エクステン
ションを目指す社会教育の機能を果たすことになっ
たことは注目すべき点である。そして、さらにその
翌年には、一般公開へ向けた、教育博物館観覧規則
も定められた。

「広島高等師範学校教育博物館観覧規則

第一条 教育博物館ハ本規程ニ依リ公衆ノ參觀
研究ヲ許ス

第二条 十五歳未満ノ児童、乱酔者又ハ精神病
者ト認メラルハ者ハ入館スルコトヲ得ス

第三条 本館ハ当分ノ内毎週火、木、土、ノ三
日間正午十二時ヨリ午後五時迄開館ス但シ特別
ノ事情アル者ハ前条以外ノ日時ニ於テモ学校長
ノ許可ヲ得テ観覧スルコトヲ得

第四条 入館セントスル者ハ所定ノ観覧証ニ住
所、官職又ハ職業、姓名、年齢等ヲ記入シ受付
ニ差出スヘシ

第五条 參觀中ハ静寂ヲ旨トシ喧騒喫煙其他
人ノ妨害トナルヘキ行為アルヘカラス

第六条 陳列品ヲ使用研究セントスルモノハ事
務所ニ申出テ許可ヲ受クヘシ

第七条 陳列品又ハ備付ノ器物類ヲ毀損シタル
時ハ相当ノ代価ヲ以テ弁償セシム

第八条 凡テ本館ノ規則及館員ノ指揮ニ従ハサ
ルモノ又ハ不都合ノ行為アル者ハ直ニ退館セシ
ム」²⁰

この規則によると、15歳未満は入館を許されてお
らず、広島教育博物館が子どもを教育する場として
よりもむしろ、教育研究の場として公開されていた
ことがうかがえる。また、それから3年後には、従
来の3部制から、研究部と陳列部の2部制に組織替
えがあり、規程も改正されたが、一般公開の原則に
変化はなかった。

「広島高等師範学校教育博物館規程

第一条 教育博物館ハ教育ノ学理及實際ニ関ス
ル研究ヲナシ且ツ諸般ノ教育品ヲ陳列スル所ト
ス

第二条 本館ニ左ノ二部ヲ置ク

研究部 陳列部

第三条 本館ニ主事ノ外幹事一名ヲ置キ庶務ヲ
処理セシム

第四条 本館ハ公衆ニ対シ無料ニテ観覧ヲ許シ
又希望ニヨリ第一条ノ研究ヲナスコトヲ許ス

観覧、研究ニ関スル規程ハ別ニ之ヲ定ム

第五条 本館ハ隨時教育展覧会講演会等ヲ開催
スルコトアルヘシ

第六条 本館ハ教育上ノ問題又ハ教育品ニ関シ
質問ヲナシ若クハ批判ヲ乞フ者アルトキハ成ル
ヘク之ニ応スヘシ

第七条 観覧研究ニ供スル目的ヲ以テ官庁学校
等ヨリ教育品又ハ教育図書ノ委託ヲ受ケタルト
キハ時宜ニヨリ之ニ応スルコトアルヘシ」²¹

広島教育博物館の展示は「一時に若くは固定的に
多数のものを蒐集陳列すると云ふよりは、或るプラ
ンの下に時々陳列換を行つて研究に便ずることにな
つて」²² おり、通俗教育のためにさまざまな展覧会

も開いた。たとえば、1916（大正5）年9月14～21日には「欧州戦争の写真展覧会」が開かれ、観覧者数は1日平均2,355人、総計18,830人にのぼった²³。

では、どのような人が広島教育博物館を訪れていたのだろうか。1919（大正8）年11月10～24日には「代用品展覧会」がひらかれたが、広島高等師範学校の教諭の報告によると「一般市民の来館者が多く」また「各中学校などでも……教師が生徒を引率して来観」したり「地方の学校の理科担任の先生などが、合同して終日熱心に観覧」したりと、教育関係者が研究のために訪れることはもとより、一般市民や中学生までもが広島教育博物館を利用しており、特に教師が生徒を引率してきて「一々実物に就いて素素学習せる理科や、地理や、家事科などと連絡して説明」することや「生徒の課題として一々出品物の調査を命じたる」こともあり²⁴、先に述べた、モンローの辞典が定義する教育博物館と学校博物館の両方の性格を有してしたことがうかがえる。

この点について、教授の岡部は、モンローの辞典を紹介したうえで、「しかして、本校の性質上教育博物館と学校博物館との両者の特色を併有するものの如し、我が教育参考室は世の教育界との交渉を頻繁にし教育家は實際研究の結果を提供批評するに利用し、我が会は亦機関雑誌によりて批評研究の結果を公にして識者の是正、補導に俟たん」²⁵と述べている。この「代用品展覧会」が開催されたとき、『学校教育』は、「代用品号」と名付けた特集号を出版した²⁶。そこでは、展覧会の様子や出品物の写真、代用品についての論文13本、展覧会の状況が掲載された。

広島高等師範学校では、1921（大正10）年にペスタロッチ研究会がつくられ、広島教育博物館内にペスタロッチ室が設けられ、肖像画や関連図書が収集された。ちなみに、昭和3年度の『広島高等師範学校一覧』に掲載されている広島高等師範学校の平面図には、ペスタロッチ室がみられる。

翌1922（大正11）年からは「ペスタロッチの夕」を催し、記念講演会や広島教育博物館におけるペスタロッチ関係資料の展示会が開かれた。この夕は戦後に至るまで長く継続し、一般にも公開されてペスタロッチ精神を広く普及させることに役立った²⁷。また、教育研究論文を募集したりした²⁸。

5. 玉川大学の教育博物館

現在も「教育博物館」と呼ばれる施設が、玉川大学に存在する。玉川学園の創立者である小原國芳は、広島高等師範学校の出身であり、1918（大正7）年8月から1年5ヶ月という短い期間であったが、広島高等師範学校附属小学校の訓導を務めた。これはちょうど広島教育博物館が、規則も整い様々な活動をさかんに行っていたころである。しかしながら、小原が広島高等師範学校で教鞭を執っていた時代の回顧録のなかに教育博物館に関する記述はみられない。また、数多く残されている著作物のなかにも、教育博物館をテーマにして記されたものはない。そのため、小原の教育博物館に対する思いのなかに、広島教育博物館がどのように影響していたかを知ることができない。しかし、教育博物館に関わる小原の語録をみつめることはできる。例えば、1913（大正2）年に児童図書館について述べた際に「教場は子供博物館であって欲しい」²⁹と結んでいるし、また東海大学の海洋博物館の開館式に出席した日には「私も、新教育六十年以来、世界一の教育博物館を夢みて来ました。いささか蒐集もして来ました。今日は、松前さんのオカゲで教育博物館を実現すべき度胸を与えられたことを感謝しました」³⁰と記している。他にも、「図書館は大学の基盤であり、象徴です……更に教育博物館です。世界には多数の立派な博物館があります。しかし、教育を主題とした博物館は見当たりません。これも、長年の間にかなりのものが集まって来ています……偉大な方の遺品や文庫、教育に関する歴史的な品々が子供達に与える影響は、はかり知れぬものがあります。この人類の宝を集め保管し展示するために、博物館をなんとしても作ってやりたいのです」³¹とある。玉川学園で教育実践をしていくなかで、小原はしばしば「学校には図書館と博物館が必要である」と周囲の人たちに言っていたという³²。小原には、玉川学園において教育博物館を実現させようという強い意志があったことがわかる。

そうした小原の遺志をうけて、玉川大学では、1987（昭和62）年に教育博物館を開館させた。開館に寄せて書かれた、唐沢富太郎の一文のなかには「玉川学園の創立者小原國芳先生は、実物を通して教育することの重要性を説き、教育博物館建設の切なる

願いをこめて、この世を去られました。この度先生逝去後10年、生誕100周年を記念して、小原哲郎現学園長の手によって教育博物館が作られた」³³と紹介されている。玉川大学教育博物館の発端は、学園が創立された1929（昭和4）からの教材標本の収集にあると同館の案内書に記されている³⁴。小原は先述のように、自らが開いた学園でもそのを試みをなし、没後になってそれがようやく実現をみたのである。

6. むすび

広島教育博物館は、中等教員養成という機能を拡張し、附属学校をその中に巻き込み、内部の者だけでなくひろく一般教育界を啓発するというダイナミックな装置として機能した。それは、教授用品の研究を行ない、『学校教育』という雑誌をとおして博物館の活動を公報し、論文を募集したり、教育に関する問い合わせに答えるなどして、市民への「教育」公開の場となったからである。東京教育博物館が開館した直後に、あいついで設立された地方教育博物館は、短い期間で廃館していったが³⁵、後発の広島教育博物館は、東京が教育の名前をはずし、その内容も教育から自然科学へと変えていったあとにも「教育」を通して社会教育を行ない、長く継続した。

日本にただ2つ存在した東京と広島的高等師範学校の教育博物館は、大正初期には、教育研究という点において目的と活動に共通性が見られるものの、その誕生や発展の道は大きく異なっていた。広島は、海外にもモデルをもとめ活発に活動していたが、その展示の様子をみたかぎりにおいては³⁶、陳列台の上に物をならべていて、通俗教育館においてはやくも生態展示を取り入れていた東京からは、博物館の経営方法そのものについて遅れをとっていたように思える。しかし、東京が変化したにもかかわらず、独自の道を歩いていったのは、教育研究のための内からの必要性和北条校長の「遺志」をうけた事業として関係者の寄付金をもって誕生したことに起因する。注目すべきことは、広島教育博物館の活動や図書館の公衆観覧室の公開などをとおして同校が著名となり、広島が学都と呼ばれるようになっていくことへの相乗効果を発揮したことであって、その点に

広島教育博物館の特質が見い出せるのではないかと考えられる。

研究と教育のための機関であった高等師範学校が、その研究の発表の場として、教育のための場として、博物館を保有していたこと、そして、それが学校関係者だけでなく、市民にも利用されていたということは、非常に興味深く、大学に附属する博物館の機能や発展を考えるうえでも、示唆をあたえてくれるのではないだろうか。

註 釈

- 1 拙稿「教育博物館における教育機能の拡張—手島精一と棚橋源太郎による西洋情報の受容—」『博物館学雑誌』第23巻2号、1998年3月。
- 2 倉内史朗、伊藤寿朗、小川剛、森田恒之『日本博物館沿革要覧』野間教育研究所紀要別冊、講談社、1981年、によると、1942（昭和17）年まで存続していたことは、明らかである。戦時体制下でその機能は縮小され、原爆の災禍のために灰燼に帰して、以後同窓会によって再建の動きはあったものの蘇ることはなかった。ただし、そこでの活動のひとつであったペスタロッツ祭は形をかえて今日まで継続している。くわしくは、三好信浩「教育博物館の話」『広大フォーラム』第286号、1991年2月。
- 3 Monroe, P., *A Cyclopedia of Education*, Vol. IV, The MacMillan Company, 1913, p. 332.
- 4 下田次郎「教育博物館に就いて」『教育界』臨時増刊号『東京教育博物館』1903年、31頁。
- 5 石附実『世界と出会う日本の教育』教育開発研究所、1992年、82頁。
- 6 Andrews, B. R., "Museum of Education", *Teachers College Record*, Vol. IX, No. 4, September, 1908.
- 7 Andrews, op. cit., p.9および、村山英雄『オスウィゴ運動の研究』風間書房、1976年、127頁。
- 8 拙稿「手島精一の教育博物館経営—文部省の博物館政策との関係を中心に—」『日本教育政策学会年報』第5号、1998年3月。
- 9 広島高等師範学校同窓会『尚志同窓会誌』第19号、1915年7月。

-
- 10 Andrews, op. cit.
- 11 『芸備日日新聞』1906年12月20日。
- 12 『官報』第7439号、1909年4月17日。
- 13 広島大学二十五年史編集委員会『広島大学二十五年史 包括校史』1977年、39頁。
- 14 岡部為吉「教育参考室に就きて」『学校教育』第1号、1914年1月、3-5頁。
- 15 「教育博物館便り」『学校教育』第26号、1916年1月、108頁。
- 16 幣原坦「御大礼と其記念」『学校教育』第24号、1915年11月。
- 17 注15に同じ。
- 18 『広島高等師範学校一覧』自大正4年至大正5年（1915-1916）。
- 19 同上、自大正5年至大正6年（1916-1917）。
- 20 同上、自大正6年至大正7年（1917-1918）。
- 21 同上、自大正9年至大正10年（1920-1921）。
- 22 「教育博物館便り」『学校教育』第33号、1916年8月、85頁。
- 23 「教育博物館便り」同上、第36号、1916年11月、176頁。
- 24 吉田俊造「代用品展覧会の状況」第66号、1919年2月、73-82頁。
- 25 注14に同じ。文中「わが会」とは同校校友会の附属団体である教育研究会をさす。『学校教育』はその教育研究会の事業として刊行された。
- 26 『学校教育』第66号、1919年2月。
- 27 三好信浩『日本師範教育史の構造-地域実態史からの解析-』東洋出版社、1991年、163頁。
- 28 「教育博物館便り」『学校教育』第45号、1917年7月、76頁、「教育博物館考案及び論文募集」同上、第60号、1918年8月、74頁。
- 29 小原國芳「児童図書館論」『イデア』1923年1月。
- 30 小原國芳「昭和45年5月」『小原國芳全集40巻 教育公演行脚・身辺雑記（11）』玉川大学出版部、1971頁、323頁。
- 31 小原國芳『全人教育』臨時増刊、1977年9月。
- 32 玉川大学教育博物館館長代理山口高弘氏談。
- 33 唐沢富太郎「実物を通しての教育-玉川学園教育博物館の開館によせて-」『全人教育』第469号、1987年7月、2-8頁。
- 34 『玉川大学教育博物館 展示案内』「教育博物館の概要」
- 35 当時の「教育博物館」としては、大阪府立教育博物館（1878年開館、1881年博覧場に合併）、福岡教育博物館（1878年開館、1881年廃館）、鹿児島教育博物館（1878年開館、1880年廃館）、教育博物室（島根）（1879年開館、1886年廃館）があげられる。
- 36 『学校教育』第66号、1919年2月。